

A Study on History of Football in Britain(V)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20428

英国におけるフットボールの歴史に関する研究(5)

秦 修 司

A Study on History of Football in Britain (V)

Shuji HATA

緒 言

英国のフットボールの歴史において、フットボールに対する反対の主要な根拠は二つあったが、それら二つとも実際的なものであった。第一にフットボールは戦時における軍事訓練の、特に弓術の妨げになったこと。第二は、街路でのフットボールは不法妨害であったことである。1500年ごろから、フットボールが軍事訓練の妨げになるとは看做されなくなっている。しかし、第二番目の反対の根拠は強く、事実、町がその数や規模において増大するにつれて、より差迫ったものとなった。その弊害は、現実には、19世紀まで克服されることがなかった。若干の少い地方では、昔の伝統と公的な秩序の間に妥協がなされたけれども、その弊害は続いた。16世紀になると、フットボールに対する新しい攻撃で、しかも強力な攻撃が展開された。それは倫理や宗教に基づくものであり、ピューリタンによる、その主たる目標を、フットボールにそして一般的には娯楽・スポーツの、特に日曜日の娯楽・スポーツに定めた攻撃である。

Marplesは、著書、A History of Football (1954)の第5章、THE PURITAN ATTACK (52頁-65頁)において、フットボールに対するピューリタンの攻撃について叙述している。

そこで Marples の叙述に基づき、フットボールに対する代表的なピューリタンの立場や見解について追究する。

本 論

英国のフットボールの歴史において、中世、日曜日の午後、教会において礼拝のあと、どれ程娯楽や気晴しがなされてきたことか、従って日曜日にどれ程しばしばフットボールが行われてきたことか。このお祭り騒ぎの多くは無害であったのは疑いのないことであるが、必ずしもそうではなかったのである。というのは、日曜日を例外的自由の日と看做することについてピューリタンではない人々の多くが疑問を持ち始めたからである。その状況はピューリタンの日曜日に娯楽をなすことに反対する運動にとって好都合であった。安息日には如何なる娯楽も、もしくは気晴しもあってはならず、如何なる労働もあってはならないというのがピューリタンの原則であった。そしてこのことについては妥協はまったくなかったのである。必然的に、この厳格な安息日厳守者の態度とメリー・イングランドの例外的自由の精神の間に衝突が生じた。

ピューリタンによってフットボールのゲームが受けた最もあからさまな攻撃は、Philip Stubbesによるものであるが、彼は、有名なAnatomie of Abuses in the Realm of England (1583)の中でのスポーツに反対する運動の過程において、フットボールのゲームを攻撃したのである。スポーツがどんなに無害なものであろうと、Stubbesの激しい攻撃から逃れたものはほとんどなかった。Stubbesは、フットボールに

は、それは近代の墮落であるという根拠のもとにより激しい攻撃を与えた。論文は若者の Spudeus が次の質問をするという経過で対話の形式をとっている。つまり、

フットボールをすること、楽しい本を読むこと、その他同じような楽しみは安息日に対する違反もしくは冒瀆にあたるのだろうか？¹⁾

これに対し、彼の師である Philoponus は次のように答えている。:

安息日にであれ他の日にであれ、我々を敬虔な心から分離するような運動はすべて邪悪なもので禁じられるべきものである。そもそも上述の運動が我々を敬虔などや徳から分離のみならず、我々に呼びかけて邪悪や罪に誘うことを見て取らぬほどひどい盲目の人があろうか。²⁾

彼は続けて、極めて誇張してフットボールを説明しているが、次の語で終結している。

ここから恨み、悪意、遺恨、怒り、憎悪、不快、敵意等が生まれてくる。そして経験が日々教えてくれるように、喧嘩、口論、言争い、喧嘩の吹っかけ、人殺し、殺人それに大がかりな流血が起こるのである。さて、この殺人的遊戯が安息日に行うべき運動であろうか？このように1人の人が他の人を不具にし、傷つけ、しかも殺意ないし明確な意図をもってそうすることがキリスト教徒たるに恥じぬ振舞いと言えるであろうか？これは他人からしてもらいたいと思うことを他の人に対してすることになるであろうか？神よ、我々を同胞の身体に対していっそう心を用いる者となさし給え！³⁾

このことが、ピューリタンの日曜日のフットボールの問題についての教義であった。

安息日を破った者に対し、Stubbes は激怒をもってしたのであるが、訴訟手続きをとることによってより実際的な行動をとる者もいた。そのような事例についての記録の中にフットボールのゲームが特に述べられている。例えば

Rochster の司教である Edmund Freke の 1572 - 1574年の司教巡察個条において、その動機は日曜日の秩序を厳守させることにあったのだが、日曜日のフットボールを禁圧すべきである⁴⁾と要求した。同様に 1592年5月5日、Essex の Asheldham において、Richard Jeffercy が Essex の司教座聖堂助祭長の前に、「復活節月曜日の晩課の時間に人々を集めて Hackwell でフットボールをした」咎で出廷し、礼拝が行われていた事実を知らなかったと弁明したが、生活保護費受給者に対し4ペンスを支払うよう命じられた⁵⁾。助祭長の関心は、多分に、人々が、当然、礼拝していなければならない時間に彼等がフットボールのゲームを行っていないことを確認することであった。助祭長は司教と同じように、ピューリタンというよりはむしろ改革者であったかもしれない。この段階では、ピューリタニズムの影響は教会内だけにしかなく、地位の高い聖職者より地位の低い聖職者の間に広まっており、ピューリタニズムはまだ明瞭な宗派に至っていないことを念頭においておく必要がある。従って、若干の場合において訴訟手続きの背後にピューリタンの心情があったかどうかは不明であるが、訴訟手続きのほとんどの事例では、多分に、その背後にピューリタンの心情があったのである。記訴状の中に安息日の語が見られるところではどこでもピューリタンの心情があったこと看做してよい。

1613年の Middlesex County Records の中にフットボールを行ったというよりはただ単にフットボールのゲームを組織した咎で罪に問われた例がある。1613年(ジェームズ1世の治世第10年)7月5日、Middlesex 州 Holborn の St. Andrew's の教区の Jawes Willson が安息日に「Ely Feild なる場所にて多数の身許不詳の輩を呼び集め、彼等と共にフットボールと称する不法なる競技をなせり⁶⁾」との咎で告訴された。時にはフットボールのゲームの観客でさえ告訴された。1610年ごろに、ただ単に日曜日にフットボールを観たために Bedford の大執

事裁判所への出廷を命じられている⁷⁾。1616年、YorkshireのGuisboroughにおいて、より奇妙な事例でさえ生じたのだが、その場合、1人の男がフットボールを行った又はフットボールを観たというのでなく「安息日にフットボールの選手たちのために宴会を催した⁸⁾」咎で特別法廷に出廷を命ぜられている。如何なる状況においてこの宴会が催されたかについては不明である。この時代のフットボールについての訴訟の事例は、ただ単にフットボールを行った者に関するものであったに違いなく、多分に極めて多くの訴訟があったと考えられるが、それらの記録がない。しかしそれらの必要不可欠な詳細においてはほとんど差異がないものであろう。その例として典型的なものが2つある。第1に、二人の男が礼拝の時間にChesterのSt.Werburgh'sの共同墓地においてフットボールを行った咎で罰金2シリングを科せられている⁹⁾。この場合、安息日についてはまったく述べられていないが、これが日曜日になされた可能性は充分ある。フットボールのゲームが古い習慣に従って共同墓地で行われたのは興味深いことである。第2番目は、1609年4月26日、12名の者がただ単に安息日にフットボールをした咎で、YorkshireのThriskの四季裁判所で告訴されている¹⁰⁾。

ピューリタンの聖職者や裁判官たちは、彼等の地域社会の人々にピューリタンとしての意見を押しつけるべく最大の努力をしたが、より高いレベルでの論争はより激しくなった。女王エリザベス自身は英国国教系教会に対する如何なる脅威をも許容することがなかった。というのは、ピューリタンは司教の廃止を唱え、すでにスコットランドにおいて存在した長老会が教会を治めるシステムを好んだからである。そして女王エリザベスは、特にJohn Whitgiftが大司教の職にあった時、国教を奉じないピューリタンに対する弾圧を強化した。1603年、ジェームズ1世が王位を継承した時、弾圧されたピューリタンは弾圧の緩和を求め、より同情的な処置

を求めて、言わゆるMillenary Petitionをジェームズ1世に奏上した。ジェームズ1世は正統なAnglicansとピューリタンを交じえた会議を開催したが、彼は如何なる譲歩もする意志がなく、ピューリタンの運命はまったく改善されなかった。事実、ジェームズ1世はピューリタニズムに対する断固として敵意を表明した。1618年、彼は日曜日の礼拝の後になされる娯楽・スポーツについて公的に認可したThe Declaration of Sportsもしくはそれがよくそう称されるようにBook of Sportsを出したが、そこで彼は日曜日にゲームを行うことをはっきりと正当化しており、従って、ピューリタンの教えに対する直接の強い抗議であった。「スポーツを禁ずることは」と彼は次のように不平を述べている。つまり、

我々もしくは継承者たちが彼等を利用する機会がありし時に、平民で身分の低い者たちの、戦士のために彼等の身体を強じんにする運動を行う障害となる。しかるに、不道徳な飲酒や暴飲がうまれることとなり、居酒屋において怠惰で不平不満の発言の数多きを生じせしむこととなる¹¹⁾。

さらにジェームズ1世は、スポーツを禁止することによって、日曜日が人々にとってあまりにも魅力的でなくなれば人々は教会から離れていくために、宗教に対する危険があると不平を述べている。奇妙なことであるが、「The Declaration of Sports」の中では、フットボールについての記述がまったくない。フットボールは許可されるとも禁止されるともはっきりと述べられていないが、「ただし不法なる競技はすべて依然として禁じられるものところに看做すものなり¹²⁾」という但書を含んでいる以上、又フットボールを禁ずる立法が（布告がはっきりと名指ししているボウリングの場合と同様に）まだ効力を有するものであった以上、フットボールは日曜日に行くことが認められた競技の中には入っていなかったとしてよいだろう。ジェームズ1世は、Basilikon Dron, or His Majesties'

Instructions to his Dearest Sonne Henry the Prince (1603) において自らフットボールを非難している。

ほん宮廷から、それを行う者を強くたくましくするというよりは不具にするのに適したフットボールのような乱暴で激しいすべての運動を締め出すものとす。しかし、あなたに望む運動は、適当であって熟練することはなくても構わないが、走、跳躍、レスリング、フェンシング、ダンス、キャッチボール、テニス、アーチェリー、ペル・モル、そして他の規則正しく、楽しいフィールド・ゲームである¹³⁾。

スコットランドにおけるジェームズ1世の祖先は、彼とは異った見解を持っていたかもしれないがジェームズ1世がフットボールは王子たちにとって適当でないと考えたのは明らかである。しかし平民で身分の低い者にはフットボールを許可しなかったことはない可能性は極めて大きい。Aubrey の Natural History of Wiltshire の記録にある 1615 年の場合には、田舎の人のチームの間のフットボールの試合は王のためにふさわしい接待と看做された。つまり、

この地方にお運びになった折、国王ジェームズ1世陛下は Bromham の Sir Edmund Baynton の屋敷にご宿泊なされた。その際、Ferraby 氏は Cotefield の Bush で自作の田園詩をもって陛下をおもてなし申しあげた。陛下がこのようにして楽しまれている間……オルガンの御前演奏が続けられた。そして、この音楽によるおもてなしの後、自分の教区民たちによるフットボールの試合を御観に供した。当時、この教区は音楽とフットボールと鉄輪投げにかけては全イングランドに挑戦してもおかしくはなかったのである¹⁴⁾。

これは Wiltshire の Bramham においてであったが、司教の代理である Ferraby が、その後に教区民のフットボールの試合が行われる彼自作の田園歌と余興でジェームズ1世をもてなした

と言われている。Ferraby は王ジェームズがフットボールを是認したとの確信がなかったならば、あえて合法でないゲームを組織しなかったのは確かである。しかしながら、ジェームズ1世のゲームに対する明確な態度、又は彼の「The Declaration of Sports」にてフットボールについて言及しなかった理由がどんなものであるにせよ、後になってのピューリタンの抗議は、フットボールが実際に、一般に日曜日に行つてよいと許可されていたことを示すものであるかもしれない。

ジェームズ1世自身は、そのために生起することを怖れて、彼の宣言を効力あるものにするためのことは何もしなかった。その宣言は、事実、ひとつの司教区だけしか発されず、それをピューリタンの聖職者に強いるような行動はまったくとられなかった。しかしながら、チャールズ1世は、1633年に再びその宣言を表明し、大主教の Laud¹⁵⁾の支援を得てピューリタンに対して極めて強硬な措置をとった。彼は礼拝においてその宣言を読むのを拒否した聖職者を聖職禄から除外した。このために、ピューリタンによる激しい反応を引き起こすこととなった。

ピューリタンの William Prynne¹⁶⁾が「Divine Tragedie lately acted」の表題のパンフレットでもって反撃を試みたのであるが、その中で彼は安息日にゲームに夢中になった人々を襲う神の最後の審判の例を出して、特に、「The Declaration of Sports」を攻撃した。これらのうちの2つはフットボールに関するものである。

1634年1月25日の主の日、近年まれなる厳寒の時に、Gainsborough 近くの Trent川にてフットボールを行っていた若者14名が取組みあいをしていたが、突然氷山が崩壊し、彼等の8名が溺れた¹⁷⁾。第2番目の例はさらに劇的である。

Hitchin から程遠くない Hertfordshire はずれの Chidlington にて、聖日に多くの者どもがフットボールの試合をなしており、その1人が残りの者どもを集めるべく

鐘を鳴らしており、2、3の者が彼等の集会場である教会に入ろうとしていた。すると突然、雷鳴とどろき、すぐ近くの丘を黒の玉がころげ落ちてきた。：玉は直接、教会に向かい、邪魔なく鐘にとびあたり、最初、鐘を鳴らし者を殺害し、次には教会のまわりを大騒ぎし、ついには破裂し、イオウに似た悪臭を残した。それ故、貴重なる時間を空費した者どもに恐怖を残した¹⁸⁾。

神の復讐が安息日を破った者や他の罪人を不意に襲うといった考えは、この時代に拡がり、ピューリタンの考えを貫いた人の中で数世紀続いた。South WalesのCaerwent近くのLlanfair教会の踏み段として用いられた墓石に、多分にこの時代に属する読み人知らずの奇妙で興味深い作品が刻まれている。

日曜日に、ボール遊びをなす者は誰でも、月曜となるまでに、悪鬼にすっかり、とり憑かれるだろう¹⁹⁾。

日曜日のフットボールはピューリタンの激しい非難にもかかわらず、チャールズ1世が権威を振っている時代は、多少とも妨害されることなく続けることができたようであるが、フットボールのゲーム自体は不法のままであったのももちろんのことである。時には、地方の当局に不法妨害として取締られることもあった。しかし、ピューリタンは、フットボールに対する攻撃の機会を持ち、できるだけすみやかに攻撃を再開したのである。例えば、1647年、NorthumberlandのHexhamにおいて、安息日にフットボールを行った違法行為で2シリングの罰金が科せられている²⁰⁾。

一方、スコットランドでは、国境を除いて、さらに厳格な安息日厳守が、日曜日にフットボールを行う者にとって事態を困難にしていたが、それが彼等を落胆させることはなかった。スコットランドの日曜日のフットボールに対する攻撃の手段は、ののしり、中傷、喧嘩、そして安息日破りなどの違法行為について独善的な判決を下した長老のグループであるスコットラ

ンド教会の法廷であった。1584年から細詳に記載されたElginのスコットランド教会の法廷の議事録から、フットボールはその当地では支配力を有しており、教会当局から脅威で見られていたことがわかる²¹⁾。そのことについては、Highlandsを除く他のすべての地方でもまったく同様であった。Elginにおいて、1618年12月18日に出された命令からわかるように、この時代、異教の儀式や迷信に対する運動がなされている。つまり、

古い儀式そして祭式の迷信的慣習は、クリスマスと称される季節の間は、断固として禁止するものとし、完全に避けるか慎むよう命令するものなり²²⁾。

他の教多くの地方から、17世紀前半の安息日を厳守しないフットボールの記録がある。1600年6月4日、FifeshireのKincappleの男たちが、Trinity Sundayにフットボールを行ったり、他の娯楽に耽ったとしてSt. Andrewsのスコットランド教会の法廷で告訴されている²³⁾。1607年、Aberdeenの若者たちが、安息日に、「飲酒、フットボール、ダンス、教区から教区への徘徊」などの神聖を冒した行為をなした咎で告訴されている²⁴⁾。1618年、LanarkのDalsell村において、5月最初の日曜日に、教会の構内でのフットボールを含めて、「切れ端を燃やし、それを使って大いに楽しむ」といったMay Pole²⁵⁾をまわるダンスがある²⁶⁾。1620年3月29日、PerthshireのExmagirdleにおいて、2人の男が主日に、フットボールを行ったことを自白し、二度とフットボールを行わないことを約束している²⁷⁾。1628年、Carstairsにおいて、教区民たちが男女ともども、フットボールを行ったり、ダンスをしたり、馬鹿騒ぎをするといった傲慢な振舞いについて、聖職者が不満を述べている²⁸⁾。1648年、Rayne, Culsalmond,そしてAberdeenの様々な教区民たちが、主日に集合して、大衆フットボールをなした不埒な行為で有罪になっている²⁹⁾。聖職者自身でさえ、時々日は日曜日のフットボールに熱中しているか又は、イングラ

ンドの流儀でフットボールを行うことが許されている³⁰⁾。国境地方では日曜日のフットボールの試合は日常的に行われており、時には襲撃、殺人、殺害につながっている。結局、スコットランドの議会は1656年9月17日に、すべての乱暴で騒々しいゲームを禁止することによって主日をより厳守する法案を通過させた。³¹⁾

これらの例からスコットランドのピューリタニズムは、人々の伝統的な日曜日の娯楽・スポーツとの戦いで苦闘していたことが明らかである。すでに理解したように、イングランドでは1618年のジェームズ1世の「The Declaration of Sports」以来、日曜日のスポーツが許可されていた。その宣言はスコットランドでは適用されなかったが、影響がまったく無かったことは考えられないので、宣言がスコットランドの改革者に事態を困難にしたに違いない。

日曜日の娯楽についてどんなことが考えられようとも、フットボールが彼等のイングランドの同時代の人々より熱狂的で血気盛んであるスコットランド人のものに自然になったのは確かである。15世紀におけるすべてのスコットランドの王はフットボールが弓術や他の軍事訓練の障害となったので、フットボールを禁止してきた。これらの禁止が効果があったとは考えられない。それらの禁止は、多分にイングランドよりスコットランドにおいてはるかに効果がなかったようである。Sir David Lyndsay (1490-1555)によるThe History of Squire Meldrumの主人公が弓術とフットボールの両方で賞を獲得したという事実から、フットボールは弓術と並んで盛んであったことがわかる³²⁾。16世紀の終りにShrove TuesdayのフットボールはGlasgowにおいて盛んであったこと、そしてフットボールは、フットボールの代償を支払い、フットボールのボールを供給した靴屋に特権を与えた市当局によって奨励されたという証拠がある。つまり、

参事官および全議員の立会いの下に、製靴業 Johnne Neill は市民かつ自由民とさ

れ……その科料は、終身毎年、告解火曜日
に上等なるフットボール6個、またはその
代価として20シリングを納むることを条
件に免除するものとす。上記 Johnne が上
記参事官および議会にその趣きに提出せる
嘆願に応ずるものなり³³⁾。

これは1533年初めに、フットボールのゲームを弾圧するために効果的な措置をとったChester市当局の態度と強い対照をなしている³⁴⁾。街路でのフットボールは、スコットランドではイングランドよりは強くは反対されなかったようである。ただ単に街路でフットボールを行ったために告訴された最初の記録は1682年5月1日のものであるが、その年Banffの選手たちは40シリングの罰金を科せられた³⁵⁾。

スコットランドのフットボールにおいて極めて興味深い面があるが、それは16世紀から17世紀の変わり目ごろに顕著になっているが、それは国境地方の侵略、略奪そして暴力と関係している。フットボールの試合は、しばしば、国境地方の略奪の先駆けであったが、イングランドの当局はフットボールの選手を監視するようになった。1595年、イングランドの国境地方のWardenのMonmouth伯であるSir Robert Careyは回顧録において、彼や彼の兄弟がフットボールの試合があること、そしてその場に騎手長たちがいたのを知っていたことについて言及している。そして彼は、彼等はイングランドに侵入して来る略奪者たちを取締まるために配置していた偵察者を殺害する予定であったと結論づけている。

まもなく、私の弟と私はフットボールの試合がなされることそしてそこに騎手長たちがいることを知った。彼等が対戦する場所はShelseyであり、我々がそのことを聞いた日は試合の日であった。我々はただちに参事官を呼び、試合後、彼が来た最大の役目は偵察隊を殺害することであることが結論づけられた³⁶⁾。

これは、現在ではKelsoとして知られるShel-

seyにおいて生起したのであるが、その地方では今日までボール・ゲームは盛んに行われている。

2, 3年後、フットボールに関するより難しい問題が Sir Robert Carey の注目するところとなった³⁷⁾。Armstrong 家の 12 名のスコットランド人がイングランド人である Rydley の友人たちを殺害した。Rydley はスコットランドに侵入するという法を犯すことなく友人の復讐をする目的で、Armstrong 家の者たちが国境を越えてイングランドに侵入してくるのを待伏せていた。彼の復讐の機会は、1599 年 5 月 13 日の日曜日に、イングランドにおいて Armstrong 家の者 6 名と Bewcastle 家の者 6 名とでフットボールの試合が行われ、試合のあと Bewcastle 家にて宴会がなされるという知らせが届いたときにおとずれた。Rydley は友人を集め、Armstrong 家の者たちを待ち伏せしていた。Armstrong 家の者たちが国境を越えようとするとき誰かが待ち伏せされていることを警告した。彼等は Redley や彼の友人である Nychol Witton の喉をかつ切って、首尾よく逃亡した。この事件の詳細が Woodrington によって Carey に文書で報告された。その後日談については不明である。すぐ翌年の 1600 年に Armstrong 家の者は、様々な国境地方の人々や友人たちが、日曜日にその目的で集ったフットボール試合において Carmichael 家の John Carmichael を殺害した。彼等の 1 人、Thomas Armstrong が逮捕され、有罪の判決を受けて右手切断、その手は吊るされ、その身は鎖で吊るされた³⁸⁾。

上述してきたことが、スコットランドの国境地方において日曜日のフットボールが行われてきた状況であった。日曜日だけでなく他のすべての日にフットボールを行うのを取り締まる正当な理由があったと考えられるが、フットボールを取り締まったという試みがまったく記録されていない。国境地方では安息日厳守は広まっていなかったのである。

スコットランドの他の地方では、この時代のフットボールは激しい喧嘩につながるものが時々あったが、記録されているものでたとえそれが殺害につながらなかったとしても、もう少しで殺害につながったかもしれない類のものであったのは明らかである。例えば、1611 年、スコットランドの諮問機関に、Perth の Kirmichael 家の若い男たちが気違いじみたフットボールを行うという口実で、火縄銃、ピストルそして他の武器で武装して Campbell の田舎の ballgreen に集まり、高慢で挑発的な振舞いをなしたとの訴えがなされている³⁹⁾。この場合、その挑戦には応じなかった。しかし、1601 年 6 月 18 日の諮問機関の注意を引いた Berwick の Lockton - in - the Merse での同様の例では、犠牲者については何も述べられていないが、ピストルや火縄銃は実際に発砲されている⁴⁰⁾。フットボールの試合中、事実、レフリーが居なかったところでは、必ず起こったに違いないようにプレーヤーたちは互いに喧嘩や口論をしたのであるが、この場合、彼等は素速く武器をとり発砲したのである。この問題についての諮問機関の決定については不明である。喧嘩や口論がどんなものであったにせよそれが喧嘩の原因であるという根拠でフットボールが取り締りを受けたことはないようである。

ピューリタンのスポーツに対する態度を考えると、特別に前王である王スチュアートが自由共和国の政府に奨励を与えられたことから、政府はフットボールに厳しかったことが予期される。自由共和国の政府が地歩を固めるとすぐに他の形態の娯楽と同様にすべてのスポーツを廃止したという陳述が時々なされる。しかしまったくの事実においてその類のことは何も起きなかった。そのような言説を正当化する根拠はまったくない。生起したことのほとんどは聖人の治世中、多分に、「The Declaration of Sports」が出される前よりも頻繁に訴訟がなされたことであるが、それでさえほとんど証拠がない。議会は、一度、日曜日にフットボール又

はボウリングを行った人々は、主の晩餐式から排除するとの見解を表明したが、新しく法律制定がなされることはなかった⁴¹⁾。

自由共和国の間になされたフットボールの選手の訴訟は、先だつ100年間に記録された訴訟と全く異っていない。1653年、つまり自由共和国最初の年に4名の男が、「フットボールと呼ばれる不法にして禁じられたる競技を法に背きて行いたる」咎でMaidstoneの四季裁判所に召喚されたが、出廷したためしがなかったので、判事たちは治安官に彼等を拘留しなかった咎で科料に処した⁴²⁾。1656年、Maidstoneの薬剤士であるJohn Bishopは、High Streetでフットボールを蹴り、「この共和国の善良なる人民を多大の不安動揺に陥れた」咎で起訴された⁴³⁾。Manchesterの領主刑事裁判所は、この時代はフットボールの措置に極めて積極的であったようである。例えば、1655年10月9日、「本陪審は治安官に対して当町の街路においてフットボールをなせるすべての者を告発するよう命ずる。」⁴⁴⁾とある。翌1656年10月7日、その命令をより強い調子で繰返した。

当領主刑事裁判所の陪審は本年度の治安官に対し、街路にてフットボールをなす者のなきよう、またかかる者のある場合にはこれを告発するよう心を配り、本命令の公布以後においてこれに違反せる者をその罪に応じ法令の定むるところに従って罰するよう特に心を配ることを命ずるものなり⁴⁵⁾。

そして、1657年10月6日、それを再び同じ用語で繰返した⁴⁶⁾。とにかく、Manchesterではフットボールのゲームを取り締まる積極的な手段がとられていた。それは共和国とは何も関係がなかったかもしれない。というのは、Manchesterの領主刑事裁判所はすでに1608年にフットボールを取り締まる意図があったからである⁴⁷⁾。

1660年、Bristolで生起した事件から判断すると、民衆は必ずしも彼等のお気に入りのフッ

トボールを廃止する試みに耐える積りはなかった。というのは、1660年、Shrove Tuesdayの前日である3月5日に判事が、彼等がかつてよくそうしたように町のふれ役を使って雄鶏倒し、犬投げ、そして街路でのフットボールを禁止する布告を発した時、その布告は公然と無視され、ついには騒動まで発展していったからである⁴⁸⁾。

ここで、ピューリタンであるOliver Cromwell自身がCambridgeのSidney Sussex Collegeの学生時代(1616—17)、素晴らしいフットボールの選手であったことは注目する価値がある。Oliver Cromwellは学生時代、フットボールである程度の名声を得ている。

彼は学業よりもフィールドでの運動で有名であった(学業では学位を取るだけの取柄や長所がなかったので学位を受ける榮譽を与えられなかったのである)、というのもフットボール、棍棒術、その他粗暴なスポーツやゲームの主だった準備係および競技者の1人だったのである⁴⁹⁾。

このことについての信実性は、それについてCromwell自身が確認しなかったにしても疑わしいかもしれない。Oliver Cromwellのフットボールにおける偉業にふれたので、彼の学生時代の仲間で後にMassachusetts Bay Colonyの聖職者となったJohn Whelewrightについて語らなければならないが、アメリカの聖職者であるCotton Matherは、1708年1月3日付の手紙の中でWhelewrightについてCromwellが次のように言ったと伝えている。

その後、戦場でいかなる敵に相見えるよりもフットボールでWhelewrightと相見える方が恐しかった頃を想い出させる。というのは、彼には絶対間違いなく足をすくわれたからである⁵⁰⁾。

Cromwellは彼の仲間の多くとは違って、スポーツに関心を持ち続けた。彼は1654年諮問機間の多くの者と有名な紳士数名を伴って、100名の紳士によって伝統的な銀製のボールで行わ

れた Hyde Park でのハーリングの試合に出席している。その年 1654 年 5 月 4 日付の Moderate Intelligencer 紙は、その試合を掲載し、選手の素晴らしい敏捷性や上手で絶妙の取っ組みあいを称賛している。⁵¹⁾

結

Marples 著の A History of Football の第 5 章, Puritan Attack に基づき、16 世紀になって展開されてきたピューリタンによるフットボールに対する攻撃について、ピューリタンの立場や見解について考察してきた。

ピューリタンは神の戒に従って厳格な日曜日の安息を求めた。安息日の厳守は世俗的な労働から完全に離れることを意味していた。しかし、現実には、日曜日の教会での礼拝の後での午後には当時の英国人たちは、ピューリタンの考えとは異って様々な娯楽・スポーツを行っていた。

安息日の娯楽・スポーツ、特にフットボールに対してピューリタンは、それは安息でなく労働であるから、更にフットボールによって人々を神の信仰から引き離す結果になり、そして結局安息日の神聖化の否定になるので、フットボールを反対・攻撃の対象としたのである。

註及び引用・参考文献

- 1) F. J. Furnivall ed., Philip Stubbes' Anatomie of the Abuses in England in Shakespeare's Youth, A. D. 1583 (New Shakespeare Soc., ser. VI. No. 6, London 1879), I., p. 137. quoted in Magoun, History of Football from the Beginning to 1871, p. 29, 1938. (原典: Is the playing at foot - ball, reding of mery bookes, and such like delectations, a violation or prophanation of the Sabaoth day?)
- 2) F. J. Furnivall ed., *ibid.*, p. 137. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 24 (原典: Any exercise which withdraweth from godines, either upon the Sabaoth or any other dayes, is wicked and to be forbidden. Now, who is so grosly blinde that seeth not that these aforesaid exercises not only withdraw us

from godlines and vertue, but also paile and allure us to wikednes and sin.)

- 3) F. J. Furnivall ed., *ibid.*, p. 137. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 30. (原典: And hereof groweth envie, malice, rancour, cholor, hatred, displeasure, enmitie, and what not ells; and sometimes fighting, brawling contentions, quarrel picking, murther, homicide and great affusion of blood, as experience daily teacheth. Is this murthering play, now, an exercise for the Sabaoth day? Is this a Christian dealing for one brother to mayme and hurt another and that ukon prepensed malice or set purpose? Is this to do to another as we would wish another to doe to us? God make us more careful over the bodyes of our brethren!)
- 4) W. H. Frere, ed., Visitations, Articles and Injunctions of the Period of the Reformation, III, p. 343, 1910. puoted in Magoun, *ibid.*, p. 25.
- 5) Andrew Clark ed., Lincoln Diocese Documents, 1450 - 1544 (E. E. T. S, Orig. Ser, No. 149, 1914) p. 213. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 31.
- 6) J. C. Jeffreson, ed., Middlesex County Records (Middlesex County Records Soc., 1887, II, p. 81). quoted in Magoun, *ibid.*, p. 34. (原典: on the said Sabbath Day, James Wilson late of the said parish, gentleman, gathered to himself very many unknown persons in a certain place called Eely Feild, and did play with them a certain unlawful game called football.)
- 7) John Brown, John Bunyan, p. 6, 1928, quoting without precise reference from the Act Books of the Court of the Archdeaconry of Bedford. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 33.
- 8) The North Riding Record Soc., II, p. 137, 1884. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 34. (原典: for making a banquet for football players on the Sabaoth.)
- 9) Rupert H. Morris, Chester in the Plantagenet and Tudor Reigns, p.p. 331 - 32, 1893. puoted in Magoun, *ibid.*, p. 30.
- 10) The North Riding Record Societh, vol I, Quarter Session Records, p. 151, 1884. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 33.
- 11) The King's Majesty's Declaration to his subjects concerning Lawful Sports to be used: a History

- of the Declarations of King James I. and King Charles I, as to the Use of Lawful Sports on Sundays, 1890. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 31. (原典: barreth the common and meaner sort of people from using such exercises as may make their bodies more able for war, when we or our successors have occation to use them. And in place thereof sets up filthy tiplings and drunkenness, and breeds a number of idle and discontented speeches in their Ale - houses.)
- 12) S. R. Gardiner, *The Constitutional Documents of the Puritan Revolutions*, P. 31, 1889. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 35. (原典: But withal we do here account still as prohibited all unlawful games)
- 13) *Op. cit.*, ed., p. 120, 1603. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 92. (原典: From this court I debarre all rough and violent exercises, as the foot-ball, meeter for mameing than making able the users thereof, but the exercises that I would have you use, although but moderately, not making a craft of them, are running, leaping, wrestling, fencing, dancing and playing at the catch, or tennisse, archerie, palle - malle, and such like other fair and pleasant field - games)
- 14) John Britton ed., *Sir John Aubrey (1626 - 1697), The Natural History of Wiltshire*, written between 1656 and 1691, p. 109, 1847. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 35. (原典: With bucoliques of his own making Whilst his Majesty was thus diverted the organ was placed on for state; and after this musicall entertainment he entertained his Majesty with a foot - ball match of his own parishioners. This parish in those days would have challenged all England for musique, foot - ball, and ringing.)
- 15) William Laud (1573 - 1645): 英国 Canterbury 大主教でピューリタニズムの弾圧者; 反逆罪で処刑された。
- 16) William Prynne (1600 - 1669): 英国のピューリタンの指導者で多くの小冊子を書いた。
- 17) Andrews (I), 13, quoting *op. cit.*, 1626, II. quoted in Marples, *A History of Football*, p. 58, 1954. (原典: On Jan, the 25th, 1634, being the Lord's Day, in the time of the late great frost, fourteen young men, presuming to play at football on the river Trent, near Gainsborough, coming altogether in a scuffle, the ice suddenly broke, and there were eight of them drowned.)
- 18) R. Lennard ed., *Englishmen at Rest and Play* p. 109, 1931. quoted in Marples, *ibid.*, p. 58. (原典: At Chidlington upon the edge of Hertfordshire not farre from Hitchin, a company of fellowes upon a holy day being to play a match at football, one of them was tolling the bell to assemble the rest, some being come into the Church the randevoze of their seeking, suddainly thundering was seene a blacke ball come tumbling downe a hill neer by: which took its course directly into the Church, there it flew into the bell free and first slew him that tolled the bell, then it flustered about the Church and hurted diverse of them, and at last bursting, left a filty stinke like to that of brimstone, and so left a terror to all such spend thrifts of precious time.)
- 19) Manuscript note in copy of *Antiquitates Vulgares*, with Brand's addenda, ed., 1777. quoted in Marples, *ibid.*, p. 58. (原典: Who ever hear on Sunday will practis playing at Ball it may be before Monday The Devil will Have you all.)
- 20) Allen. B. Hinds, *A History of Northumberland*, III, p. 283, 1896, reference to the Hexham Mauor Rolls. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 50.
- 21) William Cramond ed., *The Records of Elgin*, II, p. 158, 1908. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 92.
- 22) Quoted in Marples, *ibid.*, 6. 59. (原典: It is ordered that the superstitions observance of old rites and ceremonies expressly forbidden during the season called Yewle, that they be completely shunned and eschued.)
- 23) David H. Heming ed., *Register of the Minister Elders and Deacons of the Christian Congregation of Saint Andrews* (Scot. Hist. Soc. Pubs., VII, 1890. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 91.
- 24) Sir. J. G. Delyell, *The Darker Superstitions of Scotland*, p. 93, 1934. quoting from the unedited

- Presbyterie Buik of Aberdeen, quoted in Magoun, *ibid.*, p. 92.
- 25) 五月柱, メイポール: May Day のお祝いの間じゅう浮かれ騒ぐ人たちがそのまわりで踊ったり遊戯をしたりする花とりボンで飾りためた高い柱。
- 26) R. Chambers, I, p. 487. quoted in Marples, *ibid.*, p. 60.
- 27) Dugald Butler, *The Ancient Church and the Parish of Abernethy*, pp. 357 - 8, 1897. quoted in Magoun, p. 93.
- 28) R. Chambers, I, p. 488. quoted in Marples, *ibid.*, p. 60.
- 29) John Davidson, *Inverurie and the Earldom of the Garioch*, p. 302, 1878. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 94.
- 30) R. Baillie, *Letters and Journals*, I, p. 126, 1775. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 195.
- 31) *Acts of the Parls. of Scotland and the Bovt. during the Commonwealth*, vol. VI, pp. 865b, 867a, 1872. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 94.
- 32) David Laing, ed., *The Poetical Works of Sir David Lyndsay* ed., vol. I, p. 193, 1879. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 89.
- 33) *Extracts from the Records of Burgh of Glasgow*, A. D. 1573 - 1642, vol. I, p. 149, 1876. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 105(原典: In presens of the baillies and counsall, Johnne Neill, cordiner, is maid burges and friemanquhais fines as remittit to him for furneissing yeirlie during his lyftyme upon Fastreinis Ewin of sex guid and sufficient but ballis, or ellies tuentie shillings as the price thairof, conforme to dne supplication gevin in be the said Johnne befor the saidis baillies and counsall for that effect.)
- 34) 秦修司, 英国におけるフットボールの歴史に関する研究(4), 金沢大学教育学部紀要, 教育科学編, 第41号, pp. 268-269, 1992年。
- 35) William Cramond, *The Annals of Banff*, vol. I, p. 63, 1891. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 93.
- 36) *Memories of the Life of Robert Carey, Earl of Monmouth*, Written by himself, p. 92, 1759. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 90. [原典: It was not long after that my brother and I had intelligence that there was a great match made at foote - ball, and the chiefe ryders were to be there. The place they were to meet at was Shelsey, and that day we heard it, was the day for the meeting. Wee presently called a counsaile, and after match dispute it was concluded, that the likeliest place he (sic) was to come to, was to kill the scouts.]
- 37) *The Society of Antiquaries of Newcastle - upon - Tyne*, *Proceeding*, 3rd ser., vol. I, p. 232, 1905. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 91.
- 38) Robert Pitcairn, *Criminal Trials of Scotland*, ed., vol. II, p. 364, 1833. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 91.
- 39) David Mason, ed., *The Register of the Privy Council of Scotland*, vol. IX, p. 301. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 93.
- 40) David Mason, *ibid.*, vol. VI, p. 262. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 92.
- 41) *Acts & Ordinances*, vol. I, p. 791. quoted in Marples, *ibid.*, p. 63.
- 42) J. M. Russell, *The History of Maidstone*, p. 281, 1881. quoted in Marples, *ibid.*, p. 63.
- 43) Luke Owen Pike, *A History of Crime in England*, vol. II, pp. 188 - 9. 1876. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 53.
- 44) J. F. Earwaker, ed., *The Court Leet Records of the Manor of Manchester*, vol. IV, p. 143, 1887. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 52.(原典: the Jurie doe Order the Constables to precent all persons for playing att foote - ball with in the Street of the towne.)
- 45) *Ibid.*, pp. 170 - 71. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 52. (原典: The Jurie of this present Leet doth order the present Constables for this yeare shall take a care to prevent and precent the players att the ffootball in the streets and take a special Care to Punish the offenders herein after the publication hereof accordinge to their deweritts and accordinge as the statute has provided;)
- 46) *Ibid.*, p. 209. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 52.
- 47) 秦, 前掲論文, p. 268.
- 48) John Latimer, *the Annals of Bristol in the Seventeenth Century*, p. 292, 1900. quoted in Magoun, p. 107.
- 49) S. T. (= James Herth ?), *Flagellum: or the Life and Death, Birth and Burial of Oliver Cromwell*

- the late Ursurper, p. 8, 1663. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 75. (原典 : he was more Famous for his Exercises in the Fields than in the Schools, (in which he never had the honour of, because no worth and merit to, a degree) being one of the chief Matchmakers and Players at Foot - ball, Cudgels, or any other boysterous sport or game.)
- 50) Letter to George Vaughan, agent in England for New Hampshire, printed by Jeremy Belknap, *The History of New Hampshire*, vol. III, p. 339, 1972. quoted in Magoun, *ibid.*, p. 75. (原典 : that he could remember the time when he had been more afraid of meeting Whelewright at football, than of meeting any army since in the field ; for he was infallibly sure of being tript up by him.)
- 51) Jenkin, pp. 236 - 7, quoting *The Moderate Intelligencer*, May 4th, 1654. quoted in Marples, *ibid.*, p. 65.